説教余滴 2019 年 6 月 9 日

「二十四節気」や「七十二候」は、平安時代に日本の暦に取り入れられましたが、中国大陸と日本列島では位置も地理も違います。そこで後に渋川春海という江戸時代の天文暦学者が日本の気候に合わせて改訂版を出し、その後明治時代にも新たに「略本暦」が出てそれまでの「七十二候」を大幅に変えました。現在使われている日本の七十二候はこれが元になっています。6 月は水無月、梅雨期で水が多い時期を水無とは？
6 月の初旬はまだ 5 月を引きずっています。節気は「小満」の末候、第２４候「麦秋至」6 月 1 日～5 日、麦のとき至る、とされます。写真カレンダーにはこんな言葉が。

「新緑の季節に、麦畑だけが黄金色に輝きます。
この時期のお祭りには、小麦餅を食べることが多いようです。」

言葉が色鮮やかな光景となります。さすが文筆家、平野恵理子さん。イラストレーター、エッセイスト、山歩きや旅、暦や年中行事などの暮らしについての作品が多数。
次の六日間は、節気の「芒種」、初候で第 25 候、「螳螂生」（かまきりしょうず）6 日～10 日。　「螳螂が、草むらや林で愛嬌ある姿を見せるころです。
そろそろ　入梅も間近。」

5 月といえば初夏の候。これまで多くの場所では、カッコウの声を聞きました。南から海を越えてやって来て、本州の山中で繁殖します。高原などでは、カッコウ・カッコウと啼き交わしながら飛翔する姿をよく見ました。その高原が、観光客などに占領されるようになると姿も声も消えてしまいます。もっと奥の方、静かなところに移動しているようです。同じ頃、テッペンカケタカ、と鳴くホトトギスも渡来します。三浦半島はホトトギスと適合性が高いのでしょうか。よく、その声を聞きます。45 年前になるでしょうか。真昼の横浜霊園で、その啼き声を聞きました。新緑に囲まれ、さわやかに感じたことです。